

入選

優しさのプレゼント

香川県 宇多津中学校 2年 和田 悠里

これは、私が小学生の頃の話だ。私の地域では、ボランティアの方が毎朝早くから横断歩道付近に立って、小学生の登校を見守る活動がある。そのボランティアの方々は、小学生から「あいさつの人」や「あいさつおじさん」と呼ばれることが多い。

私の通学路でいつも立ってくださっているあいさつおじさんは、あまり笑わず、無表情のことが多く、一見怖そうに見える。だが、その人は私が小学1年生の頃から、強い風の日も雨の日も、珍しく雪が降る日も毎日欠かさず立っている。おじさんは、子どもに話しかけられると、少しほほえんでいつも話をしている。子どもだけではなく、1年生に付きそっている母親やサラリーマンの方ともよく話をしているのを見かける。

とても気さくでやさしいあいさつおじさんだが、私は1度もおじさんと話したことがない。私は特別人見知りでもなく、社交的な方だが、初めて会ったときの第1印象で怖そうだと思ってしまって、やさしい人だとわかってからも話しかけられずにいた。

だが、ある日、あいさつおじさんに、

「和田さん。」

と声をかけられた。私はとても驚いた。「一度も話をしたことがないのに、どうして私の名前を知っているのだろうか。」と。しかし、初めて聞いた低くて温かくやさしい声に私は不思議と安心した。すると、おじさんは少し緊張していたのか、ぎこちないほほえみとそのやさしい声で私に、

「和田さん、図書館に絵がかざられているでしょ。見たよ。とても絵がうまいんだね。すごいね。」と仰ってくださった。私はもともと絵画教室にかよっていて、その作品が図書館にかざられていた時期だった。だが、私の作品は数十枚の中のたった1枚で、今、中学生の私から見てもうまいと言われるほどのものではなかった。

しかし、おじさんはすごいと言ってほめてくれた。私はそのときものすごくうれしかった。まるで、突然、サプライズでプレゼントをもらったような温かい気持ちになった。私が、

「ありがとうございます。」

と言うと、にこっとほほえんでおじさんはいつもの位置に戻っていった。

おじさんは、私が中学生になった今でもいつも変わらず立っている。あいかわらず無表情のときが多いが、私は知っている。おじさんの心の中には、やさしさというプレゼントがつまっていることを。

私は心の中でひそかに（あいさつおじさんではなくて、本当は『あいさつのサンタさん』の方がしっくりくるんじゃないかな。）と思っている。ほかにも私みたいにサンタさんからやさしさのプレゼントをもらった子はいるのではないかなと思う。そして、これからもそういう子たちが増えていくと思う。私は改めて思う。（やさしさをありがとう。）と。